

令和3年3月31日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住 所 山形県西置賜郡小国町大字小国小坂町2-70
管理機関名 白い森人創生プロジェクトチーム
代表者名 山形県小国町長 仁科洋一

令和2年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業に係る研究開発完了報告書を、
下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

令和2年4月10日（契約締結日）～令和3年3月31日

2 指定校名・類型

学校名 山形県立小国高等学校
学校長名 地主 好
類型 地域魅力化型

3 研究開発名

白い森人 創生プロジェクト

4 研究開発概要

山形県立小国高等学校（以下「本校」という。）では、生徒が他地域との比較や地域の人々との関わり等を通じて自身の生活の場である小国町を理解するとともに、それらの活動を通じて見えてきた地域課題について解決策を検討して自ら実践する研究・学習活動（小国町での地域学習とキャリア教育とを複合させた研究・学習活動。以下「白い森学習」という。）を展開している。

本事業においては、小国町指定の保小中高一貫教育を一層活用し、本校における白い森学習を地域人材としての個性の確立を図る段階と位置づけるとともに、コンソーシアムである山形県立小国高等学校学校運営協議会（以下「学校運営協議会」という。）を活用し、地域の様々な主体と協働することにより、より効果的・実践的な取組に発展させる。白い森学習の一環として、地域の諸課題を研究テーマとして設定し、大学の研究者等や地域関係者からの協力・指導を得ながら研究を行う探究型の学習活動である「地域文化学」を総合的な学習（探究）の時間の中で実施している。現在1年次を対象として行われている地域文化学の名称を「白い森未来探究学」とし、これを3年間かけて2、3年次まで拡充するとともに、地元産業界等と提携してより

地域に密着した実践的な研究活動に発展させる。また、教育課程外の取組においても、実践的な白い森未来探究学で得られた知見や経験を生徒の出発点とし、地元産業界等の協力の下、農林業に係る営利活動体験、企業発信型の長期間にわたるインターンシップへの参加など、地域に密着した実践的なキャリア教育を行う。さらに、これらの過程において、大学との連携、ICTを活用した遠隔教育の導入、アントレプレナーシップ教育等により積極的に外部人材等を活用することで、生徒に地域内だけにとどまらない幅広い分野で新しい価値を提供できるカリキュラムを研究開発する。

5 学校設定教科・科目の開設，教育課程の特例の活用の有無

- ・学校設定教科・科目 開設している ・ ○ 開設していない
- ・教育課程の特例の活用 活用している ・ ○ 活用していない

6 運営指導委員会の体制

氏 名	所 属 ・ 職	備 考
岡崎 エミ	東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科学科長	
牛木 力	東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科専任講師	
阿部 剛志	三菱UFJリサーチ&コンサルティング	

7 高等学校と地域との協働によるコンソーシアムの体制

①コンソーシアムの構成団体

機関名	機関の代表者名
小国町	仁科 洋一 (町長)
小国町教育委員会	遠藤 啓司 (教育長)
山形県立小国高等学校	地主 好 (学校長)
山形県教育委員会	菅間 裕晃 (教育長)
山形県立小国高等学校同窓会	安部 昌晴 (会長)
山形県立小国高等学校後援会	伊藤 明芳 (会長)
山形県立小国高等学校PTA	渡邊 重信 (会長)
小国町認定農業者協議会	大谷 健人 (会長)
小国町森林組合	河内 昭佐 (代表理事組合長)
クアーズテック株式会社小国事業所	菊池 俊之 (所長)
日本重化学工業株式会社小国事業所	谷川 芳和 (所長)
小国町商工会	伊藤 通芳 (会長)
学識経験者	安藤 耕己 (山形大学地域教育文化学部教授)

8 カリキュラム開発専門家，海外交流アドバイザー，地域協働学習支援員

分 類	氏 名	所 属 ・ 職	雇 用 形 態
カリキュラム 開発専門家	岡崎 エミ	東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科学科長	謝礼対応
地域協働学習 支援員	渋谷 洋司	統括的な地域学校協働活動推進員 (兼) CS ディレクター	会計年度任用職員
	阿部 宣行	高校魅力化コーディネーター	地域おこし協力隊

9 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

①管理機関（コンソーシアム含む）における主体的な取組について

活動日程	実績の説明
令和2年5月18日	第1回実務者レベル会議の開催 ・実務者レベル会議の持ち方、第1回学校運営協議会の内容、事業の進め方等について協議 ・今後の事業実施内容及び経費支出予定の把握 ・コーディネーターの役割について
令和2年7月14日	第2回実務者レベル会議 ・地域との協働による高等学校教育改革推進事業について ・中間報告と今後の計画について
令和2年7月28日	高校生と地域の方とのトークフォークダンスへの参加 ・小国高校2年生21名出席 ・地域の大人18名
令和2年8月28日から 12月9日	若者プロジェクト「小国地域みらい塾」へ小国高校生2名が参加し、地域づくりについて学習
令和2年10月20日から 3月中旬（予定）	若者プロジェクト「季の風（ときのか）人材育成プロジェクト」へ小国高校生4名が参加し、写真や動画について学習
令和2年11月13日から 14日	第3回全国高等学校小規模校サミットの開催 ・小国高校ほか20校参加 参加高校生数162名（うち小国高校生65名） ・13日前夜祭 14日本番
令和2年12月12日	「小国高校学校祭」白い森未来探究学発表会 小国高校生1年生24名発表 地域の大人15名参加
令和2年12月17日	小国高等学校を支援する会研修会 演題「津和野高校と現在値とその価値」 講師 東北芸術工科大学コミュニティデザイン学科 専任講師 牛木 力 氏 参加者24名（コロナ禍により限定して開催） 高校魅力化の価値について学習。
令和2年12月13日	小国町主催「白い森小国ビジネス創出塾」へ小国高校生2名が参加。それぞれ起業アイデア賞、審査員特別賞を受賞。
令和3年2月1日	2学地域実践学発表会（オンラインとオフラインのハイブリッド発表会） 参加者 町長始め大人約80名（オンラインを含む） 高校生約70名

	発表した生徒へ大人が質問及びコメント。
令和3年2月19日	町議会が主催「町議との意見交換会」高校2年生が町議会議員に町が活性化するための提案を行った。
令和3年2月23日	労働と健康 地元企業と連携したオンライン事業を行った。労働災害防止や健康社員の健康増進の取り組みを学習。
令和3年3月18日	ハタラト——ク！ 地元企業若手社員等と働くことについて話すことで働くことの意義を知った。

(2) 事業終了後の自走を見据えた取組について

今年度の事業展開において、コロナ禍の中、地域との協働による高校教育改革推進事業の全国サミットはオンラインの開催となり、高校生は高度なプレゼンテーションとファシリテーターの技術が求められた。しかし、昨年度から地域との協働による高等学校教育改革推進事業を通じて様々な研修を積んだことで、動じること無くサミットを成功させるなど、高校生の成長が光った一年となっている。さらに、各種事業を実施する中で、高校と地域のつながりがより深くなっていると感じる。これらのことにより、より个性的かつ独自のカリキュラム開発とその展開を図るために、町全体で高校魅力化の価値を認めることができればさらに事業の拡充が期待される。

また、本町における少子化傾向は今後も継続することが見込まれることから、小国高校における独自の魅力あるカリキュラム開発等と平行して、全国から入学者を募集していくことについても併せて検討していく。

10 研究開発の実績

(1) 実施日程

実施項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
科目「国語」における地域での探究学習									1回			
科目「社会・家庭合同」における探究学習						1回						
科目「家庭」における地域・校内での探究学習						3回		1回	2回			
科目「体育」における地域・校内での探究学習			1回				1回					
科目「保健」における探究学習			1回							1回		
科目「英語」における地域での探究学習							1回		6回			

総合的な探究の時間における探究学習			3回	4回	1回	4回	4回	1回	2回			
「LHR」における探究学習			1回	1回	1回	3回						
課外活動における地域との協働活動			1回	6回	4回	2回	2回	2回	9回			

(2) 実績の説明

①研究開発の内容や地域課題研究の内容について

1年時完結であった地域課題解決型探究学習を「白い森未来探究学」という総称で3年間取り組む学習に改編し今年度で2年目である。1学年は「地域文化学」とし、興味・関心・意欲を高めることを目的に、地域内外の指導者による講義やフィールドワークをふんだんに盛り込み、研究の方向性を見出す学習活動を行った。2学年は「地域実践学」とし、個々が設定した課題に基づき、具体的な調査、研究活動を行った。完成年度の来年度の3学年は「地域構想学」として2年時にまとめた成果から新たな提案を行い、3年間の総まとめとする計画である。

②地域との協働による探究的な学びを実現する学習内容の教育課程内における位置付け

各教科・科目や総合的な学習（探究）の時間、特別活動（LHR、学校行事等）の中で実施。

③地域との協働による探究的な学びを取り入れた各科目等における学習を相互に関連させ教科等横断的な学習とする取組みについて

地域で活躍する方々の協力や地域内施設の活用による能動的な授業を積極的に行っている。ジェンダーに係る多様性、人権の問題など学際的な内容を国語科、環境問題についての内容を社会科・家庭科が合同で、食や住居に関する内容を家庭科、地域の方々の指導による体験的スポーツ活動を通して地域の魅力発見につなげる授業などや安全活動などを保健体育科で実施した。

④類型毎の趣旨に応じた取組について

地域課題の発見・解決を通し新しい価値観を創造することを基本理念に地域との協働による多様な活動を精力的に企画・実施した（総合的な探究の時間、授業、特別活動等）。座学だけでなく地域の外部講師との対話、協働活動や生徒が自ら校外に出ていくフィールドワークなどの活動を多く取り入れることで、自己と他者、地域との関わりを体験的に学ばせることを重視しながら、毎回振り返りの時間を設定し、学習内容のより深い定着を図った。

⑤成果の普及方法・実績について

新型コロナウイルス感染症拡大予防のため、地域の教育的イベントにおける発表や報告は行えなかったが、町報や新聞折込みによる町民への周知、地元ショッピングモールでの成果物の展示等を行った。

(3) 研究開発の実施体制について

①地域との協働による探究的な学びを実現するためのカリキュラム・マネジメントの推進体制

育てたい生徒像の共有とともに、校内に「地域との協働による高校教育改革推進委員会」を作り、カリキュラム開発専門家を交えて長期的、短期的な展望での地域の人的、物的資源の活用、教科横断的な視点での学習活動の推進体制を整えた。また、6月と10月にそれぞれコーディネーターを配置でき、2人のコーディネーターが学校と町や地域の人材をつなぐ役目を担っている。

②学校全体の研究開発体制について（教師の役割、それを支援する体制について）

全職員が分担して各種研修会に参加し、情報共有を全体で行うという形を基本に進めている。地域と協働した学習活動の企画運営は地域との協働による高校教育改革推進委員会のリーダーである教科統括主任の主導で学年や授業の担当者が外部と連絡調整を行い、該

当する学年とともに企画運営に当たるという形で進めた。

③学校長の下で、研究開発の進捗管理を行い、定期的な確認や成果の検証・評価等を通じ、計画・方法を改善していく仕組みについて

地域との協働による高校教育改革推進委員会を含めた実務者レベル会議を定期的に行い、学校長に進捗状況を報告・説明した上で様々な指導助言を求め、校内組織の改善や必要な支援等を検討している。

④カリキュラム開発に対するコンソーシアムにおける取組について

目覚ましい実績を上げている地域や高校の事例についてはオンラインで当該関係者の話を直接聞くなど、コンソーシアム全体の研修も行った。

1 1 目標の進捗状況、成果、評価

① コミュニティ・スクールの特性を活かした地域における実践的な主体との連携

1年時の地域文化学において、9講座と14のフィールドワーク、4回の研修、2度の発表会（校内）を行った。外部から招いた地域内外の講師は21名となった。取組み発表は、1年生全員が12月の学校行事の中で、現段階での個々の研究計画について校内外の参加者から広く意見を求める形で行った。2年時の地域実践学において、個人探究を7回実施した。1つのグループは小国町の道の駅の食堂で、従業員のアドバイスを受けながら1日限定の高校生カフェを開店し、自らが考案したメニューを提供した。地元新聞にも取り上げられ、来店者には講評であった。

② 保小中高一貫教育を活かした小中学校との連携による白い森学習の段階的教育

中学生の白い森学習の活動への支援として、12月14日に中学校で行われた発表会で助言や感想を述べた。

③ 地域外での表現・交流の機会を増やすことによる多様性の確保

全国高等学校小規模校オンラインサミット（11月14日本校主体の実行委員会主催）の実施前にファシリテーション研修（10月4日、19日）を実施した。

<添付資料>目標設定シート

1 2 次年度以降の課題及び改善点

さらなるICT環境の整備を整え、オンラインによる講座や研修等の充実が図られるよう、また、学習活動の企画運営の効率化、前述の評価に係るルーブリックの作成を進め、一層魅力的なカリキュラム開発を推し進める。

【担当者】

担当課	小国町教育委員会教育振興課	T E L	0238-62-2141
氏 名	後藤 園恵	F A X	0238-62-2143
職 名	教育振興課室長	e-mail	sonoe-g@town.oguni.yamagata.jp